

第37期第2回青森県社会教育委員の会議 会議概要

日時	令和7年11月28日（金）10：00～12：00
場所	県総合社会教育センター 第2教材開発室
出席者	<p>▼委員</p> <p>吉川 康久 岡 詩子 岩本 ヤヨエ 小笠原 秀樹</p> <p>越村 康英 松浦 淳</p> <p>▼事務局</p> <p>清川 喜之（生涯学習課長）</p> <p>西塚 努（生涯学習課学校地域連携推進監・課長代理）</p> <p>三上 崇裕（生涯学習課企画振興グループマネージャー） 他4名</p>
内容	<p>1 開会</p> <p>2 案件</p> <p>（1）実地調査の結果報告・分析について</p> <p>（2）諮問に係る審議事項1の内容検討について</p> <p>（3）その他</p> <p>3 閉会</p>
配付資料	<p>1 第2回青森県社会教育委員の会議次第</p> <p>2 第37期青森県社会教育名簿</p> <p>3 第2回青森県社会教育委員の会議座席図</p> <p>4 青森県社会教育委員について</p> <p>5 【資料1】第17期青森県生涯学習審議会・第37期青森県社会教育委員の会議スケジュール</p> <p>6 【資料2】第17期青森県生涯学習審議会実地調査先一覧</p> <p>7 【資料3】第17期青森県生涯学習審議会実地調査結果報告</p> <p>8 【資料4】答申の骨子案について</p> <p>9 【資料5】審議事項1の内容検討について</p> <p>10 【参考1】実地調査先提供資料</p> <p>11 【参考2】第17期諮問書</p>

1 開 会

(内容省略)

2 案 件

(事務局から「青森県社会教育委員について」「資料1」について説明)

議長 それでは次第に従いまして進めて参ります。まず案件の1つ目になります。実地調査の結果報告、分析についてです。各委員から実地調査の結果報告をお願いしたいと思います。今回報告いただくのは県外の2ヶ所の実地調査です。1つが新潟県の糸魚川市能生地区公民館、もう1つが富山県高岡市立福岡公民館、この2ヶ所実地調査を行いましたので、それぞれ報告をお願いします。

では最初に糸魚川の能生地区公民館の方からいきたいと思います。

委員 能生地区公民館は、平成17年に旧糸魚川市、旧青海町、旧能生町の1市2町が合併してできた糸魚川市にあります。糸魚川市内には21ヶ所の地区公民館があり、能生地区公民館はその中の1つです。合併前は能生町役場であった建物を使用しており、現在は糸魚川市役所の分室、体育館、図書館、調理室を併設しているため、地域住民にとって場所的にも非常に利便性が高い施設となっています。

糸魚川市全体の人口37,000人に対し、能生地区は2,052人です。今回は館長に聞き取りを行いました。その他、主事、副主事、管理運営委員6名、公民館委員16名、まちづくり推進協議会54名と連携しながら運営されています。当公民館は、青少年から高齢者まで幅広い年代の住民に向け、多彩な事業を展開しています。

事業や取組を進める上での工夫について、いくつか挙げて紹介します。1つ目は「地域対抗駅伝大会」です。学校対抗ではなく「地域対抗」としている点が、大きな特色であり魅力です。学校任せにして学校対抗にするのは簡単ですが、昔から地域対抗にしていることで、こどもたちも地域の大人たちも非常に盛り上がる大会となっています。

2つ目は「絵画教室」です。これは伝統行事である灯籠祭りの灯籠を描く教室です。こどもたちが描いた絵が祭りで使われるため、絵画教室に参加したこどもたちは自然と祭りに出る仕組みになっており、地域行事へ参加するきっかけ作りにもなっています。

3つ目は「能生地区体育祭」です。若い世代に関心を持ってもらうため、若い公民館委員がプログラムを考案しています。

その他、「絆を深める町」をテーマに学校と連携して行う「挨拶運動」、まちづくり推進協議会の部会を超えて実行委員会を組織する「夏祭り」、同協議会メンバーが受付や配膳を手伝う「敬老祝賀会」などがあります。

数ある取組の中で、同行した越村議長と共に特に感心したのが、「フウセンカズラ高齢者見守り隊」という活動です。これは15年前に地区内で高齢者の孤独死があったこ

とを課題とし、元区長などが高齢者の見守り巡回を始めたことがきっかけです。しかし、大人同士では警戒して玄関を開けてもらえないなど、うまくいかなかったそうです。そこで、こどもたちに訪問してもらおうと考えられました。小学１・２年生の理科教材でもあるフウセンカズラの苗を、こどもたちが独居高齢者宅へ届けるという取組に変更されました。

単に届けるだけでなく、苗を植えて育て、夏休み中には２、３回「元気ですか」と声をかけに行き、秋には種を回収に行きます。これにより、年間を通してこどもと高齢者がつながることができます。当初は小学生が高齢者を見守るという目的でしたが、逆に高齢者がこどもたちに愛着を持ち、館長が「見守り合い」と表現されたように、相互に見守り合う関係になっています。訪問の際も単なる安否確認ではなく、「フウセンカズラは元気ですか」と話題をつなげることができます。フウセンカズラを選んだ理由は、育てやすさに加え、花言葉が「いつも一緒」であることから選定されたとのことでした。

連携の有無については、まちづくり推進協議会、能生小学校をはじめとした小・中学校、能生町内会連合会、市内の高齢者施設や事業所などと連携しています。行政の制約がある公民館が、補助金や自主財源を持つことが可能な協議会と連携することで、活動の場が広がっています。例えば、公民館が主催して「そばの会」を行い、その収益を協議会の収入にするなど、双方にとって有益な関係が築かれています。

広報活動については、現在は SNS を使用していませんが、回覧板を通じて「公民館だより」や「まちづくり通信」を全戸配布しています。また、こどもたちの活動については、学校と連携して配布しています。

事業・取組の成果について、フウセンカズラの取組を例に挙げます。当初は独居高齢者の見守り事業でしたが、今では高齢者が「あの子が成長したな」と、将来を担うこどもたちを温かく見守るようになり、「見守り合い」の関係が築かれています。また、こどもたちは地域の中で挨拶を交わすようになり、コミュニケーション能力が向上したと考えられます。体験したことを積極的に話す様子からは、地域への愛着が醸成されていると感じられました。

事業・取組の課題としては、フウセンカズラを届けることで独居高齢者宅が特定され、防犯上の懸念につながるのではないかという点が挙げられました。これに対しては、独居高齢者宅だけでなく、協力施設や個人宅へも苗を届けることで解決しています。もう一つの課題は、公民館の地区と小学校区が一致しないため、学校側に負担がかかる点です。これについては、事業の成果を丁寧に説明し、理解を得ることで継続しています。

参加者の感想や参加者数の推移についてです。今回はオンラインでの聞き取りだったため、参加者から直接感想を聞くことはできませんでした。人口減少やコロナ禍により参加者数は減少傾向にありますが、少人数でも精一杯の盛り上がりを感じられました。

事業・取組に係る担い手の育成・確保に関しては、多くのこどもたちが様々な事業に参加していることから、まちづくり推進協議会にも若い世代が入ってきており、世代を超えて参加しやすい雰囲気ができています。このことから、担い手の継承は自然

に行われていくのではないかと感じました。

今後の展望や取り組みたいこととして、公民館活動に関心のない住民にも興味を持ってもらうため、「企業訪問」を行いたいとのことでした。これは単なる職業見学ではなく、「地元にもこういう企業がある」という知識を得たり、都会に出なくても自分の能力を発揮できると気づいたりする機会にしたいという意図です。企業の魅力をPRしてもらい、こどもたちが地元の素晴らしさを再認識することで、地元への定着やUターンの選択肢につながるような、地元愛に満ちた取組を目指しています。既存の職場体験とは視点が異なる、素晴らしい取組だと感じました。

全体を通して、住民全員が参加意識を持っているような盛り上がりを感じました。その理由を館長に尋ねると「規模がちょうどいいからではないか」との回答でした。しかし、同規模の地区は全国に多数あるため、それだけが理由ではないと思い深掘りしました。推測ですが、自治会連合会、まちづくり推進協議会、そしてそれらをバックアップする公民館の間で、常に情報交換と連携のサイクルがうまく回っていることが要因ではないかと感じました。

館長は社会教育主事の資格を持ち、社会教育への理解が深いだけでなく、日常的に社会教育の実践をされている方だと感じました。相談しやすく、人の話をよく聞き、勇気づけや実行への後押しをしてくれるお人柄でした。他の調査先でも同様の印象を受けましたが、事業継承の難しさが課題となる中で、単に事業を引き継ぐだけでなく、オリジナリティを持って新事業を立ち上げられるような人材が重要です。館長や、青森市の「クリエイトまちづくり」の方のように、地域愛を持ち、相談に乗り、人を勇気づける存在が増えれば、より良い地域づくりにつながると感じました。

議長 ありがとうございます。新潟県糸魚川市の能生地区公民館の取組について、皆様から確認やご質問はございますか。

委員 ありがとうございます。最後に触れられた「規模感」について、私なりの捉え方を述べさせていただきます。これは客観的な数字としての規模ではなく、主観的に「ちょうどいい規模感」であることが重要なのかと考えました。逆に「ちょうどよくない」とは、息苦しかったり、あるいは目が行き届かなかったりする状態を指すのではないのでしょうか。知り合いとの距離感や親しさ、会う頻度が適切で、温かみや心の通い合いが感じられるやり取りができているため、「いい規模感」という言葉で表現されたのだと捉えました。

続いて、「心が通っている感覚」という点に関連して、フウセンカズラの事例についてです。仕事でもそうですが、自分が過去に育ててきたものや生き物が関わるということは、ある種、そこに「過去の自分」が存在していることになります。それを誰かが大事に育ててくれていれば嬉しいですし、もし育て方を間違えてだめにしてしまったなら力になりたいと感じます。このように、生き物を介することで有機的な人間関係が生まれやすくなるため、この視点は活動を広げていく上でのヒントになると思います。

企画・運営する側の軸として考えたいのは、文化の継承です。私たち自身も文化を

継承し、育てられて今を生きています。その中で、こどもたちに文化や社会教育をどう伝えていくか。押し付けではなく、こども自身の体験を通じて育んでいくことが大切です。最初は「やってみよう」という形から入るかもしれませんが、活動の中で気づきを得たり、嬉しさを感じたり、時には「ありがとう」と言われたりします。そうした「情動的報酬」が得られ、内発的な動機につながるようなフィールドワークがあって初めて、主体性が生まれてくるのだと思います。

その結果として、こどもたちが地域に参加していくことになります。こどもたちは地域における「かすがい」のような存在です。関心の度合いは様々でしょうが、この文化圏の中で参加することが「心地よい」と感じられるコミュニティ作りにつながっていくのだらうと思いつながら聞いていました。

議長 ありがとうございます。お話を伺いながら、フウセンカズラの見守り活動は本当に秀逸な仕組みだと実感しました。委員がおっしゃったように、そうした取組の中で、こどもたちは地域の様々な大人に見守られ、「自分は大事に育てられてきたんだ」という感覚を醸成していくのだと思います。

それでは、もう 1 件の実地調査報告に移ります。富山県高岡市の福岡公民館について、報告をお願いいたします。

副議長 まず、福岡公民館の所在地である福岡町についてですが、高岡市の中でも旧福岡町にあたり、市の中心部からはだいぶ離れた場所に位置しています。さほど大きな町ではなく、公民館自体も実際に訪れてみるとかなりこじんまりとしていました。建物も古く、全国的に多くの賞を受賞していると聞いていた割には、青森県内にもあるような一般的な公民館と変わらない状況でした。したがって、施設環境が特別に恵まれているわけではないという状況の中で、お話を伺ってきました。

こちらの公民館では様々な事業を行っていますが、特に特徴的で有名になったきっかけは、Zoom などを活用して全国の公民館とつながったことです。コロナ禍への対応策として思いついたアイデアをすぐに行動に移し、全国の公民館に Instagram などで声をかけたところ、一定数が集まり、様々な連携事業を組んでみたという経緯があります。

全ての事業を紹介すると長くなりますので、代表的なものを紹介します。例えば「全国ご当地クイズチャンピオンシップ」という取組があります。これは小学生を中心としたこどもたちが、自分たちの地域の産物などをクイズにして出題するものです。モニターの前に集まり、画面越しに全国各地の公民館や類似施設のこどもたちとクイズを出し合い、交流を行っています。

類似の事例として、高齢者向けの「ご当地体操教室」があります。これは、高齢者が地元の体操を実施し、その様子を画面で見ながら他地域の人々も一緒に行うというものです。当初、高齢者の方々は画面に映ることに抵抗があったようですが、回数を重ねるうちに慣れ、現在ではうまく回っているとのことでした。このようにオンラインを活用することで、小規模な公民館であっても活動の幅が大きく広がり、様々な受賞歴につながっているのだと感じました。

単にオンラインを導入したといっても容易ではありません。経緯を伺うと、コロナ禍でオンラインという案が出た際、まず対応できるスタッフを集めたそうです。また、テレビなどの機材は公民館の予算では購入できないため、関連団体と連携して寄付を募るなどして整備されました。

当公民館の活動が活発な背景には、前述のような強力なスタッフを揃えたことが挙げられます。中でも「生涯学習支援員」という位置づけの女性スタッフの存在が大きいです。現在は週2回（当時は週4回）勤務されていますが、様々な企画立案と実施を担っています。感心したのは、上層部が命令するのではなく、現場に自由に任せている点です。また、支援員の方は利用者との対話を重視しており、常に利用者につながっている人が企画することで、ニーズを的確に捉えています。責任者も柔軟な考え方で見守っており、オンライン環境の整備や事業構築がスムーズに進んでいます。現場の意見を取り入れて次の事業につなげるサイクルが確立されています。特別なことをしているわけではありませんが、こうした環境が事業の成功要因になっていると強く感じました。

公民館全体の姿勢として、公民館主導で事業を決定するのではなく、利用者や地域住民から出る意見を基に具現化し、公民館はそれを支援する側に回るという点を重視されています。その結果、利用者とのコミュニケーションが図れ、少子高齢化や人口減少が進む地域でありながら、ここ数年で若い世代の利用が増加しています。これは非常に素晴らしい事例だと思いました。

盛り上がりを見せている一方で、予算面では他の公民館と同様に厳しく、わずかな経費の捻出やSNS活用のための費用も出ないといった課題は依然としてあります。現在は支援員が生き生きと活動し、中心となって回っているため良好な状態ですが、仮にその方がいなくなった場合、単純な後任探しでは済まないと考えられます。キーマンとなる人材の存在や位置づけがいかにかを感じました。

その他、地域の伝統である菅笠（すげがさ）作りや、衣食住に関わる古いものを作る体験活動なども、他地域と同様に行われています。

議長 ありがとうございます。「全国ご当地クイズチャンピオンシップ」という青少年事業は、非常に興味深いものでした。Zoomで全国の公民館を繋いでクイズ大会を行います。クイズを作成するのも子どもたち自身です。例えば、地元の郷土博物館と連携し、学芸員から地域の歴史などを学び、そこから自分たちでクイズを考案して他地域の子どもたちに出題しています。地域学習というと、地域の魅力や歴史を知るインプット型の学習を想像しがちですが、学んだことを発信するアウトプット型の地域学習である点に、大変面白さを感じました。

先ほどの報告とも重なり、職員が非常に重要な存在であることを、これら2つの事例が改めて示していると感じました。確認や質問等はございますか。

委員 生涯学習支援員の方が気になりました。報告書を拝読した際も、実践されているご本人が素敵なお方なのだろうと感じていました。視察候補に挙げた際に独自に調べたところ、Instagramでの発信が素晴らしく、「どのような方なのだろう」と以前から関

心を持っていました。人柄については先ほど伺いましたが、差し支えない範囲で、これまでの経歴や現在に至るまでの背景について、ヒアリングされていれば教えていただきたいと思います。

また、「生涯学習支援員」という枠組みについて、どのような経緯で採用されたのか、その仕組みについても伺えればと思います。

議長 実は生涯学習支援員の方は、社会教育に対する熱意と専門的な知識、スキルというよりは「マインド」と表現するのが適切かと思いますが、社会教育職員としての確固たるマインドを持っておられる方だという印象を受けました。職員になられた経緯については、館長が「一本釣り」でスカウトするような形で採用されたとのことでした。

「生涯学習支援員」の立場ですが、制度上は高岡市の会計年度任用職員となります。したがって正規職員ではなく、フルタイムでもありません。週4日勤務で、2つの公民館を兼務されています。資格の有無については確認しそびれましたが、特に免許等は必須ではないかと思われます。

委員 ありがとうございます。私の法人にもあるスタッフがいますが、彼女も私がスカウトした大変素敵なお方です。報告書やInstagramを拝見し、そのスタッフと非常に重なる部分を感じました。彼女も「私は普通の主婦なので」と言うのですが、そうした謙虚な姿勢も似ていると思いました。

個人的な話になりますが、一緒に仕事をする人材を考える際、能力のある人ほど控えめであると常々感じています。自分から派手にアピールすることはありませんが、実際に話を聞いてみると大変素晴らしいというケースが、私の経験上も多くあります。学校のクラスで例えるなら、挙手して目立つ人は分かりやすいですが、目立たなくても優秀で良いマインドを持っている方といかにつながるかが、私の中での大きなテーマでもあります。

取組に参加している子どもたちの中にも、目立たなくても内に秘めた熱い思いやマインドを持っている子がいるかもしれません。そのような子たちにどう気づくかという点は、仕組み化すると網の目をくぐってしまう可能性があり、難しい部分だと思います。明確な答えはありませんが、自分では「私は全然」と謙遜するような人材をどう見つけるかということは、大きなテーマではないかと感じました。

議長 以上で実地調査の報告を終了いたします。

続いて、案件の2つ目「諮問に係る審議事項1の内容検討」に移ります。本日、途中退席される委員の方がいるので、先にその委員から審議事項1の骨子案に関するご意見を伺います。まずは事務局から、簡単に骨子案の説明をお願いします。

（事務局から「答申の骨子案」について説明）

議長 ありがとうございます。後ほど、第3章1の（1）から（3）まで、項目ごとに区切って皆様からご意見をいただきます。その前に、退席される委員より、（1）から（3）

に関わって意見をいただきます。

委員 本日の県外視察報告を受け、また前回私が担当した田舎館村とむつ市大畑の公民館に関する調査も踏まえてお話しします。先ほどの報告で各委員から感想が出されましたが、ポイントの1つ目は、こども、大人、高齢者を事業としてどうつないでいくか、その中でこどもたちをどう巻き込んでいくかという点です。先ほどのフウセンカズラの話やクイズチャンピオンシップ、あるいは大畑の祭りの話などがこれに該当します。いかに多世代をつなぐかが重要です。

2つ目は、公民館としての持続可能性をどう考えるかです。これには、地域運営組織がどこまで育っているか、公民館が関わっていかに育てていくかという点が組み合わせられてくると思います。

多世代の関わりについて、先ほどの能生地区の「見守り」は非常に良い題材でした。同年代による見守りでは安否確認に留まりがちですが、こどもたちがフウセンカズラを介して訪問することで会話が生まれます。高齢者福祉の観点からも、会話の減少は能力の低下につながります。人と会って話をするのが重要です。独居高齢者は人と会おうのを避ける傾向がありますが、こどもたちが来ることで自分のことを話し、元気になるという効果が非常に大きいと感じました。

もう一つ、能生地区の企業訪問に関連して、職業教育についてです。地域で熱意を持って活動している人や事業を行っている個人と話をすることは、こどもたちに良い影響を与えます。「森の聞き書き甲子園」というイベントでは、中高生が名工を取材し発表する活動が20年以上続いています。企業訪問に限らず、先ほどの生涯学習支援員のような方でも良いのです。地域で熱意ある大人を訪ねて話を聞くだけでも、「こういう人たちが暮らしているんだ」「応援したいな」という気づきや、世代間の縦のつながりが生まれます。これをどう事業化していくかが鍵になると思います。

場づくりに関しては、ソフト面をまちづくり協議会などの地域運営組織が担い、ハード（場）としての公民館をしっかりと守っている点が参考になりました。将来的に公民館を行政（公）だけで維持できるかという問題が出てくる中で、どこまで民間（民）に委ねるか、指定管理や資金面をどうするかを再考する必要があります。本日の2つの事例は、その関係性が非常にうまくいっていると感じました。これまでの視察も含め、そうした点を参考にまとめていってはどうでしょうか。

議長 ありがとうございます。ただいまの発言は、（1）から（3）の項目全体にまたがる内容かと思います。いただいたご意見を整理し、答申の骨子案をバージョンアップさせていきたいと考えております。

これより、答申の審議事項1「公民館等の社会教育施設におけるこどもたちの継続的な地域学習の推進について」の骨子案について、具体的な検討を進めます。

進め方についてですが、審議事項1は（1）から（3）までの3つの柱で構成されています。それぞれの柱ごとに区切り、委員一人ずつからご意見をいただく形で進めたいと思います。本日の会議でこの骨子案を可能な限り具体的なものにしたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたします。

まず、審議事項１の（１）「幼少期からの年代に応じた地域学習の進め方」についてです。これは、これまでの審議内容を踏まえ、事務局と私で打ち合わせを行いまとめたものです。

（１）では「地域学習の進め方」がキーワードとなります。そこで、「地域学習とは何か」「どう捉えるべきか」について触れる必要があると考え、記述いたしました。様々な捉え方があるかと思いますが、実地調査の結果に照らして再考すると、地域学習には大きく３つの構成要素があると考えられます。

１つ目は、「地域とつながる」「地域の人とつながる」ことです。互いに気にかけて関係性や協同性を紡いでいくための学習です。２つ目は、「地域を知る」学習です。地域の歴史、文化、現状や課題などを知ることも要素に含まれます。３つ目は、「地域をつくる」学習です。地域の課題と向き合い、解決の糸口を探っていくような学習も、地域学習の中に展開されていると考えました。

これら３つの要素は独立しているのではなく、相互に関連し合っています。こどもたちの年齢や発達段階に応じて重点は変わるかと思いますが、実地調査を踏まえると、概ねこの３要素に集約されると考えます。これらをベースに、生涯学習審議会として地域学習をどう捉えたかを答申に位置づけてはどうかというのが、最初の提案になります。

その上で、（１）の「地域学習の進め方」に関する具体的な方策案を提示します。これまでの議論や実地調査を経て考えられる方策として、以下の４つの見出しを挙げました。

１つ目は、「地域学習の機会（事業）づくり」です。公民館等の社会教育施設における取組ですので、地域学習に関わる学習機会や事業を創出することが重要であると考え、最初に挙げました。

２つ目は、「継続的・系統的な学習の展開」です。単発の事業で終わらせず、野辺地町のふるさと学習の事例のように、長く継続し、系統的に実施していくことが重要であるため、これを方策として打ち出しました。

３つ目は、「体験を通じた学習、アウトプット型の学習」です。実地調査先でも重視されていたように、座学だけでなく体験的な学びが重要です。また、福岡公民館の「ご当地クイズチャンピオンシップ」のように、インプットだけでなくアウトプットすることで学びが深まり、広がりも生まれると考えました。

４つ目は、「多様な主体との連携」です。事業を行う際、公民館単独では限界があります。様々な団体や機関との連携が不可欠であり、特にこどもの地域学習においては学校との連携が重要な鍵となります。

それでは、（１）に関して、地域学習の捉え方や提示した方策について、委員の皆様からご意見を伺いたいと思います。

委員 ４つの方策の中で、特に核となる優先順位について述べます。前半の報告を聞いて最も重要だと感じたのは、「やりたい」「面白そう」と思ったことを、いかに気軽に始められるかという点です。背中を押したり導いたりする支援は必要ですが、要は思いついたことを始めやすい場所や協力者、応援してくれる存在がある環境づくりが重要

だと思います。

「継続性・系統性」については、最初に「継続してください」と言われるとハードルが高くなり、始めにくくなるのではないかと懸念します。結果として系統的・継続的になることは望ましいですが、最初からそれを目標に掲げると、気軽さが失われてしまうのではないかと危惧しています。

多様な主体との連携については、全くその通りだと思います。

体験について掘り下げると、たとえ最初は興味がなくても、学校の授業などで体験せざるを得ない機会があります。しかし、実際にやってみると面白かったり、美味しかったりといった発見があり、そこから情動的報酬を得て内発的動機づけにつながり、主体性が生まれます。こどもたちが主体的になると、関わる大人は嬉しくなります。その喜びから大人が新たな企画を考え、それがまたこどもたちに響くものが生まれるという好循環になります。これはエリクソンの言う「生き生きとした関係（相互性）」であり、対象の中に自分の痕跡があり、自分の中に対象の痕跡があるという双方向の関係性です。そういった関係が生まれやすい環境が重視され、方策に盛り込まれていると良いと考えます。

アウトプット型も非常に重要です。自分の痕跡が人、モノ、空間、活動などに残ることで、それが続けば安心し、なくなれば悲しいといった「情（愛着）」が生まれます。その情をどう生み出し、つなげていくかが肝要だと感じました。

改めて申し上げますが、「いかに『やってみたい』ことを気軽に始められる環境を作るか」という点が、最も重要な軸になると考えています。

議長 ありがとうございます。次の委員をお願いします。

委員 社会教育施設としての公民館をどう進めていくかという点についてですが、課題の一つとして、30代、40代の働き盛り世代や子育て世代の参加が少ないことが挙げられると考えています。こどもや高齢者を参加させる手立ては比較的考えやすいものの、この世代の参加を促すことは容易ではありません。彼らがなぜ参加しないのか、学習しようとしなかったのかを考えると、子育てや仕事で忙しいという理由が大きく、公民館のチラシを見る余裕すらないのが現状ではないでしょうか。こうした層を振り向かせる手立ての一つとして、こどもの頃から公民館に関わる機会を持つことで、将来的には参加者数も上向きになるのではないかと考えています。こどもに焦点を当て、地元愛を育む取組を行うことで、全体的な底上げにつながるはずです。その意味で、今回の「幼少期からの年代に応じた地域学習」という視点は非常に重要だと感じています。

提示いただいた4つの方策は、非常に整理されていて、考えやすい構成になっていると思います。また、地域学習の構成要素として「地域・人につながる」、「歴史・文化・現状などを知る」、「課題にアプローチする」の3つが挙げられていますが、私はその中でも「地域とつながる」、とりわけ「人につながる」ことが、地元愛や地域愛を育むことに直接つながる最も重要な要素ではないかと考えています。

議長 ありがとうございます。続けてお願いいたします。

副議長 こどもといっても様々な成長過程があり、それぞれが大事ですが、公民館全体を考えると「底上げ（ベースアップ）」が非常に重要だと思っています。利用者が自分のやりたいことを実現するのはもちろん大事ですが、それに至るまでの「根っこ」の部分、つまりこどもたちの参加の裾野を広げることが必要です。最初は、何をすればいいかわからない状態でも、たまたま置かれた環境の中で関わり、「楽しい」「良いものだ」と感じた経験が記憶に残り、次の行動や選択につながっていくのだと思います。まずはそのような環境づくりが重要であり、公民館にはその役割が求められています。

例えば、視察したむつ市大畑公民館の事例です。各町内には多くのこどもが「ねぶた」に関わる環境がありますが、各町会だけで運行できる設備や環境を整えるのは難しいため、公民館が中心となって実施しています。公民館が単独で募集をかけると、積極的なこどもや興味のあるこどもしか集まりませんが、外部の組織と協力し、こどもたちが元々持っている環境の流れの中で「今回は公民館に行くんだな」という状況を作ると、自然に参加できるようになります。そうして公民館という場所や職員との関係性が築かれていきます。関係性ができれば、何か事業を行う際も、単にチラシを配るだけでなく、顔なじみの職員から「こんな企画があるけどどう？」と声をかけることで、参加率は全く違ったものになるはずです。

このように、最初の入り口を作る部分が重要です。公民館単独で主催するのではなく、学校や町会など、こどもたちが元々所属している環境といかに連携し、黙っていても参加するような、自然に関われる仕組みを作っていく。これを最初のベースとして置くべきではないでしょうか。そうすることで、その先の「これをやってみたい」という主体的・発展的な活動につながっていくのだと思います。

議長 ありがとうございます。続けてお願いいたします。

委員 まず、(1)の構成要素である3点については、非常によく整理されており、その通りだと感じました。次に方策についてですが、挙げられた4点は十分だと思いますが、これらを実施した際に「どう叶えられたのか」「どう測るか」という評価の視点を盛り込むと良いのではないかと個人的に思いました。方策の項目を1つ増やす形にするのか、あるいは各方策を具体化するフローの中に落とし込むのかは検討が必要ですが、自由度を制限しない形で明記することが必要かと思います。

実地調査先以外にも多くの取組がありますが、アイデアや内容が素晴らしいものは「いいね」と評価されることが多いです。しかし、実施後に実際どうだったのかを検証するためには、最初から「この事業を行うことで何を測りたいか」を設定しておく必要があります。例えば、単に「こどもたちが1,000人集まり、盛り上がったから良かった」という結果で終わらせるのではなく、もし「一人一人のこどもがマイナミックに満足すること」を目的とするならば、その満足度を測る仕組みを作っておかなければ検証できません。どこに盛り込むかは議論の余地がありますが、最初に「測り方」や評価の設定をフローに組み込むことで、目的に対しての成果が可視化され、次のステップへ進めていけるのではないかと考えました。

議長 ありがとうございます。まず、審議事項１の（１）に関しては、委員の皆様のご発言を伺う限り、「地域学習の捉え方」の３つの構成要素について、概ねご賛同いただいたものと拝察します。ただ、①の「つながる」という部分が基盤になるという点は、改めて重要だと認識いたしました。

４つの方策につきましても、概ねご了承いただけますでしょうか。ご指摘通り、「継続的・系統的」であることを目的化すると窮屈になり、ハードルが上がってしまう懸念があります。これらは「結果としてそうなればよい」という捉え方が重要であると再認識いたしました。

また、こどもたちや公民館職員が「やってみたい」「面白いのではないかな」と思ったことに気軽に挑戦できる場づくり、環境づくりが基盤として重要です。先ほどの福岡公民館の事例でも、当初の計画以上にこどもたちの「やりたい」という声を受けて新しい事業が次々と生まれていました。そのようなサイクルが生まれることが重要だと感じました。

一方で、そうしたサイクルで生まれたものをどう評価し、価値を捉えるかという視点も重要になります。委員の皆様からいただいたご意見は、骨子案にしっかりと反映させてまいります。

次に審議事項１の（２）「こどもたちの地域愛を育むための方策」に進みます。「地域愛」という言葉は定義が難しいものですが、私たち生涯学習審議会・社会教育委員としての捉え方を示しておく必要があると考え記述しました。以前の審議で「若者の県外流出を防ぐための下心があるのではないかな」という議論もありましたが、そうではないという点を明確にすべきだと考えています。

そこでヒントになるのが、「こどもたち自身がこの街に生まれて良かった」と実感できることや、「大事な街だから自分も引き継いでいきたい」と思えることです。大人がそうした地域づくりに尽力し、こどもたちが「自分はこの地域で多くの人に見守られ、大事に育てられた」という感覚を持つこと。これこそが「地域愛」につながるのではないかと考えました。こうした観点で、郷土愛や地域愛を育むことについて記述できればと思います。

これらを踏まえた上で、以下のような方策案を挙げました。

１点目は「機会（事業）の充実」です。（１）では「機会（事業）づくり」でしたが、ここでは単に作るだけでなく、どう充実させるかという方策を記述します。

２点目は「こどもを愛する大人の姿勢」です。こどもに「地域を愛してください」と強いるのではなく、まず大人自身が地域のこどもたちを大事にし、愛する姿勢が基盤になるということです。

３点目は「こどもの意見表明、自己決定、参画できる環境づくり」です。「機会（事業）の充実」ともつながってきますが、事業や地域コミュニティへの参画を含め、こどもの主体性を尊重する環境を作ることが鍵になると考えました。

４点目は「他地域との交流」です。足元の地域の魅力ばかりに目が行きがちですが、海外を含めた他地域を知ることで、改めて故郷の価値や良さ、あるいは課題を発見するきっかけになります。

それでは、（２）についても、委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。順

番にお願いいたします。

委員 ありがとうございます。「この街に生まれてよかった」と感じられることは、私自身、10年以上教育や保育者養成に携わる中で目標としてきました。その先には、子どもや若者の自殺者がゼロになる世界が生まれると考えており、非常に共感しています。

共感した上で申し上げますと、「こどもに愛してほしい」と望む前に、まず「大人が楽しく生活すること」が重要だと思います。大人が楽しみ、変わりたいと思ったことを変えられる姿を見せることで、こどもたちは「大人になるって面白そうだ」と思えるのではないのでしょうか。

林竹二の言葉に「学ぶとはかわること」とありますが、人間が変わるにはモチベーションが必要です。「やってみたら面白かった」「感覚が満たされた」、あるいは他者からの承認、感謝、労い、笑顔といったフィードバックによって満たされること。エリクソンの言う「余暇と役割」の要素も関わってくると思いました。

そのような充足感を持って面白がって生きている大人がいれば、こどもたちは「そんな街に生まれてよかった」「過ごしてきてよかった」と感じるはずです。いつか外に出る機会があったとしても、様々な人と出会い学ぶ中で、「ここもよかったよね」という思いが根として残る。結果として、目指している「地域愛」が達成されていくのだと思います。

イメージとしては、シャンパンの泡のように、やりたいことに向けて次々とチャレンジが湧き上がってくるような状態です。そのため、方策の1つ目の「機会（事業）の充実」は、そうしたモデルを作る上でも非常に重要だと考えます。

3つ目の「意見表明」も重要です。大人に触発されたこどもたちが、「僕もこう思う」「こうしたい」と、普段は言いづらいことでも表現できる環境をつくることは、非常に重要な方策だと思います。

4点目の「他地域との交流」についても、私自身の国際交流の経験から重要性を感じています。交流経験がある人は、前例にとらわれない柔軟さを持っています。文化の継承や歴史への感謝という前提があった上で、「今の自分が感じていること」を行動や表現に移せる。そうした安心感のもとで、チャレンジングな発言や行動が生まれると思います。

現在の教育行政は「小さな学校づくり」に向かう傾向がありますが、だからこそ、バウンダリー（境界）を行き来する存在や行為、事業が重要です。この4つの方策を通じてそれらが盛んになれば、結果的に地域愛が育まれていくと考えています。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

委員 社会教育やボランティア、地域づくりなどに長く関わり、私なりに熱い思いを持っているつもりでしたが、いざ方策を決めるとなると非常に難しく、頭を悩ませています。

今回の「ふるさと青森を愛し、誇りに思う人づくりを推進するための方策」の中でも、特に「こどもたちの地域愛を育むための方策」を最も大切にしたいと考えていま

す。「地域愛」を育む上で、最も大きな要素は「人とのつながり」だと思っています。

方策案に「こどもを愛する大人の姿勢」とありますが、それに加えて、まず大人自身が地域を愛する姿勢を見せることが不可欠ではないでしょうか。

次に、「こどもが意見表明・自己決定・参画できる環境づくり」についてです。これは非常に重要ですが、前段の「学校との連携は不可欠」という点と、少し矛盾を感じる部分があります。もちろん学校連携は不可欠ですが、こどもたちが学校や家庭とは関係のない「社会」という場所に、個人として参画することには大きな重みがあります。学校の先生や親が何度言っても変わらなかった子が、たった1回のボランティア参加で人生が変わるような経験を、私は何度か見てきました。学校や家庭と関わりのない場所で、一人で社会に参画することの意義は非常に大きいです。したがって、参画できる環境づくりと、学校連携の不可欠さをどのようにつなげて整理するかが課題だと感じています。

また、「他地域との交流」も大切だと思います。私自身は、生まれてから学校、就職、結婚と半径1km以内で生活しており、外に出たことはあまりありません。それでも地域への愛着はありますが、外に出て初めて自分自身や自分の地域を知ることができると思うようにします。やはり、この視点も重要だと感じました。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

副議長 方策の4点については異論なく、賛成です。ただ、「愛」の捉え方は個人差があるという前提で、私の考えを2点述べさせていただきます。

1点目は、「地域を愛する大人の姿勢」が重要だという点です。こどもは大人を見て育ちますので、大人の姿は非常に重要です。家庭環境がこどもに影響を与えるのと同様に、地域を愛し、楽しそうにしている、カッコいい大人の姿を見せることが大切です。逆に言えば、「地域を愛する大人の姿勢」の中に、「こどもを愛する」という要素も含まれているのではないかと考えました。

2点目は、方策の3つ目に関わりますが、「いかに地域とこども自身の距離を近づけるか」という点です。こどもを中心（主役）に置いた事業づくりや、意思表明・参画できる環境づくりを通じて、こどもが地域との関わりを「自分事」として捉えられるようにすることが重要です。その距離感が近ければ近いほど、地域愛は強くなるのではないかと考えています。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

委員 「地域愛」とは何かについて、ずっと考えていました。言葉として「地域愛」を使うのは自然ですし、共感もします。しかし、「愛」という概念は難しいものです。そもそも「愛」は英語の「LOVE」の訳語ですが、日本に入ってきた当時、適切な訳がなく「いとおしい（愛おしい）」や「めでる（愛でる）」という言葉が当てられ、そこから「愛する」という概念が定着したと聞いたことがあります。日本では「恋をする」という概念はありましたが、「人を愛する」という概念は元々なかったため、日本人にと

って「愛する」という感覚は意外と難しいのかもしれませんが。

本来の意味である「めぐる（愛でる）」という感覚で捉えたと、「この街に生まれてよかった、引き継ぎたい」という感覚や、地域を「めぐる（愛でる）」という行為は、地域から認められる受動的なものではなく、自分から地域を「かわいがる」、あるいは「そこがすごくいいね」と積極的に思う感覚に近いのではないのでしょうか。そこに言葉としての矛盾があるのかもしれませんが、現状では「愛」という言葉が最も伝わりやすいため、このままで良いと思います。ただ、「地域愛とは何か」と考えた時に、一言で定義できない感覚がそこにあるのだと個人的に思いました。

それに続きまして、方策には「大人が地域を楽しんでいる姿を見せる姿勢」を入れた方がよいと思います。案には「こどもを愛する大人の姿勢」とありますが、先ほどの「愛」に対する考察も踏まえ、「楽しんでいる」という表現を用いた方がよいのかなと思います。例えば、大鰐町の相馬さんのお話や、実際に活動されている姿を見ると、ご本人が楽しんでおり、そのエネルギーが溢れ出してこどもたちに伝わっていると感じます。大人が楽しみ、地域に入り込み、その人自身が地域のようになっている「入れ子構造」のような状態は魅力的です。その感覚は言葉で説明しなくてもこどもたちに伝わり、「こういうことをしてもいいんだ」という安心感や肯定感につながります。したがって、大人が地域を楽しんでいる姿を見せることは、こどもたちの意識にとって非常に重要だと思います。

また、3つ目の「こどもが意思表示・自己決定・参画できる環境づくり」に関連して、言語化の段階についても考慮が必要です。こどもは「こうしたい」という感覚があっても、ボキャブラリーが育っていないため言葉で説明できず、かんしゃくを起こしたり黙り込んだりすることがあります。大人はそのことを理解し、覚えておく役割があります。長い期間が必要ですが、数年後に自分の感情や思いを表現できる言葉を獲得した時、初めて説明してくれるはずです。意思表示に関しては、そこに至るまでの長いプロセスを見守る仕組みやフロー、基盤のようなものができれば良いのではないかと思います。

議長 ありがとうございます。審議事項1の（2）について様々なご意見をいただきました。方策の2つ目に関しては、単に「こどもを愛する」だけでなく、「こどもや地域とどう関わっていくか」という大人の姿勢が問われています。「地域を楽しむ」という要素も含め、大人の姿勢についてアレンジしていきたいと思います。

また、地域愛のベースには「大事に思う人の顔が浮かぶか」という点があります。地域の中で人とのつながりをどれだけ豊かに持てるかが重要なポイントであると改めて認識しました。

それでは、（2）の構成については概ねこの形で進め、いただいたご意見を内容に反映させていきます。時間が押しており恐縮ですが、重要な点ですので、次の項目についてもご意見をいただきたいと思います。

審議事項1の（3）「地域の大人たちの学び・活動の成果をこどもたちの地域学習に生かすための方策」です。ここには、言葉の定義等は置かずに4つの方策を挙げています。

1つ目は、こどもたちが地域で活動する際に、大人が一方的に用意するのではなく、「大人とこどもたちが同じ目線で語り合う場の創出」をベースにするということです。これには、大人が取り組む地域活動の中に、こどもたちの役割や出番を創出していくことも含まれます。

2つ目は、「地域サークル、団体の方を講師にした地域学習の機会（事業）づくり」です。地域では大人の学習活動が盛んに行われていますので、そうした団体やサークルと連携した事業づくりが基本になると考えました。

3つ目は、「公民館のハブ機能の強化」です。大人の学びや活動をこどもたちの学びにつなぐ際、公民館が地域の様々な主体とつながり、ハブ的な機能を果たすことが重要になると考え挙げました。

4つ目は、「学校運営協議会や町内会などの仕組みの活用」です。大人の学びの成果を活かすためには、既存の仕組みを効果的に活用できるのではないかと考え、方策として挙げました。

それでは、（3）について、各委員から発言をお願いします。

委員 2点あります。

1点目は、「学び・活動」や「学習」という言葉の捉え方についてです。これらはどうしても座学的なものや、言語に集約され最終的に言語で表されるものをイメージされがちです。しかし、非言語の形であっても構わないし、アートやスポーツなども含まれるということを、どこかで明示した方が良いのではないかと思います。

2点目は、「学校運営協議会・町内会」の活用についてです。私自身、高校の学校運営協議会や小中学校の「おやじの会」に所属していて、仕事では保育者養成に携わっているため、幼児教育から大学まで幅広く関わっています。そうした経験から申し上げますと、具体的な組織名を挙げて活用を促す際には、どのようなやり取りをすればうまくつながるのか、あるいはどのような情報を明確に伝えるべきなのかといった点について、具体例を添えて示されていると良いと感じました。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

委員 この項目は非常に難しいと感じています。4つの方策が挙げられていますが、2番目の「地域サークル、団体の方を講師にした地域学習の機会（事業）づくり」は具体的に考えやすいと思います。一方で、1つ目の「大人とこどもたちが同じ目線で語り合う場の創出」については、もう少し分かりやすく、具体的に記述した方が受け取りやすいのではないのでしょうか。私自身、「同じ目線で語り合う場」とはどのようなものか想像してみましたが、イメージしにくいと感じました。具体的にどう書けばよいかという代案までは思いつきませんが、具体性が必要だと思います。

また、3つ目の「公民館のハブ機能」という言葉についても確認が必要だと感じました。

そして、4つ目の「学校運営協議会や町内会などの仕組みの活用」についてですが、その通りだと思いますが、実際には非常に難しいだろうと感じます。町内会活動自体

が活発でなくなっている現状がありますし、学校運営協議会についても、地域の名士が集まっているだけで実質的な機能が果たしているのか疑問に思うところがあります。実態として動けない可能性が高いと感じました。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

副議長 (3)は本当に難しいと思います。2つ目は具体例が思いつきやすい一方で、それ以外はこの先どのように書いていけばよいのか。2つ目にあるような機会をこどもに提供することは理解できます。しかし、地域の大人たちが学んだことが、こどもたちの学びにそのままつながっていくというふうに無理やりつなげようとする、話がおかしくなるのではないかと懸念しています。結果的にそうなることはあり得ますが、それを前提や目的として書きすぎると、本来の目的が変わってくる恐れがあります。したがって、書き方には慎重を期すべきだと考えました。

議長 ありがとうございます。続けてお願いします。

委員 私も非常に難しいと感じています。「大人の姿勢を見てこどもたちが取り入れていく」というのは、世の中で実際に起きている現象であり、絶対に必要なことではあります。しかし、それを意識的な方策として掲げようとする、現状の記述からは無理やりつなげようとしている感覚を受けてしまいます。具体的にどうすればよいかは思いつきませんが、(1)の「継続的・系統的な地域学習の展開」の議論と同様に、無理やり行うことを目的にしてはいけないという感覚に近いものがあります。表現の工夫が必要ではないかと思いました。

また、(3)と直接的な関係はないかもしれませんが、「地域の大人たちの学び・活動の成果をこどもたちの地域学習に生かす」という言葉を見て、逆の視点もあるのではないかと考えました。「こどもたちの学び」や「活動の成果」を大人に見せることで、大人が相乗的に学ぶことも大いにあるはずで、(3)の趣旨とは異なるかもしれませんが、方策の一環として、「こどもたちの視点で学んだこと」も重要であるという視点を含めても良いのではないのでしょうか。年齢に関係なく、こどもたちの学びが誰かのためになる可能性がありますので、そうした逆方向の視点があっても良いと思いました。

議長 ありがとうございます。(3)は難しいのですが、その他、意見はありますか。

委員 まとめづらい項目ですが、「これだけは避けたい」という逆の軸を共有できればと思います。その避けたい軸とは、「サイレンシング（発言や行動を封じること）」ではないのでしょうか。要は、「黙って聞けばいい」「言われた通りやればいい」という現象が起きないようにすることです。年齢を問わず、地域の中で「サイレンシング」にならない状態を目指すことが重要です。現時点では「これをすればよい」という単一のゴールにまとめるのは難しいため、そのような視点が必要かと思いました。

議長 ありがとうございます。(3)は非常に難しく、挙げている4つの方策もトーンやレベルが異なっている中で並列されているため、整理が必要だと感じました。例えば、1つ目の「大人と子どもたちが同じ目線で語り合う場の創出」は、前述の(2)における「こどもの意見表明・自己決定・参画できる環境づくり」とも深く関わります。そのため、これらを重ねて位置づけることも考えられます。トーンを揃えることや「これだけは避けたい」という視点を前段に記述するなど、構成を工夫することが重要だと思いました。

また、委員の皆様のご発言を伺い、改めて感じたことがあります。大人は地域で様々な学習活動や地域活動を行っていますが、そこに子どもをうまく巻き込み、一緒に活動することが基本になるのではないのでしょうか。「成果を生かす」というと仰々しく聞こえますが、「一緒に何かを行う」という視点を位置づけられれば良いと考えました。

それでは、いただいたご意見を整理し、骨子案に反映させていきたいと思います。それを次回の第5回生涯学習審議会に提案し、さらに議論を重ねて確定していきたいと思います。

時間が迫る中、1点だけご相談があります。お手元の「参考2 諮問書」にある、審議事項2及び3についてです。ご承知の通り、今回の諮問は「審議事項1」を踏まえて「審議事項2」を検討し、さらにそれらを踏まえて「審議事項3」を検討することが求められています。

しかし現状では、審議事項2及び3に関わる実地調査や議論は十分に行われていないのが現状です。このような現状を鑑みての提案になりますが、拙速な議論でまとめることを避けるため、今期の会議としては「諮問事項1」に関する答申(中間まとめ)に留め、審議事項2及び3については次期の生涯学習審議会・社会教育委員の会議に引き継いで議論していく方が、より充実した内容になると考えています。

この点について、委員の皆様のご了承をいただけますでしょうか。

全委員 異議なし

議長 ありがとうございます。それでは、今期の生涯学習審議会では、「審議事項1」に関する答申を作成し、審議事項2及び3については次期に引き継ぐ方向で、事務局にて調整・検討をお願いいたします。

長時間にわたりありがとうございます。最後に「その他の案件」として、今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いします。

(事務局から「今後のスケジュール」について説明)

議長 ありがとうございます。スケジュールに関して確認等ありますか。

以上で本日予定していた案件が終了しましたので、事務局の方にお返しします。

3 閉 会

(内容省略)